



Women Artists Association

NEWS

女流画家協会 会報

2021.5 Vol.10

- 女流画家協会・新宿展
- 特集 画家 甲斐仁代の人生



甲斐仁代 画 (個人蔵)

令和4年度(2022年度)から会期変更について

女流画家協会展は、東京都美術館 5年毎の公募展組換(使用会期)の為、5年前から5月29日～6月4日・ロビー階全部と4棟1階という形で開催しておりました。昨年、今後5年間の組換が行われ、令和4年6月5日～13日・会場同規模と決定致しました。これは5年間変更されません。1日か2日これまでより会期が長くなります。暦の上では梅雨時期となりますが、地球温暖化の影響により以前より5月から真夏日となっておりますので、あえて日程の長い会期を選択いたしました。

困難な時代と言える現在、熟考し制作を続ける意味や技術を磨く為の期間と思い辛抱強くこの状況下を楽しまなくては生きる意味を無くしそうです。この状況は生活様式を大きく変え、会報やブログの役割も大きくなりました。当協会HPブログには全国から皆様より多くの写真やコメントが寄せられており癒されます。

これからも個展・グループ展開催時のお知らせやアトリエ便り等をお待ちしております。



『2021年 女流画家協会つくば展』開催について

会期: 2021年8月11日(水)～15日(日)

会場: 茨城県つくば美術館

〒305-0031 茨城県つくば市吾妻2-8

本展終了後の2021年8月、地方展として学術・研究都市つくば市つくば美術館で、女流画家協会展を初めて開催する運びとなりました。首都圏に近い茨城県ですが、一般出品者数は伸び悩んでおります。当会のこれまでの歴史と作品約90点を展示し、女性画家の地位向上と新人育成のためという結成の理念に基づき、芸術を志す女性画家に美術に対する明るい展望を示し、新しい才能を発掘育成することが出来ればと考えます。



■つくば美術館への行き方

つくばエクスプレス: 終点「つくば駅」下車徒歩3分

高速バス: JR東京駅八重洲南口 → 「筑波大学」「つくばセンター」行き
「つくばセンター」下車徒歩3分



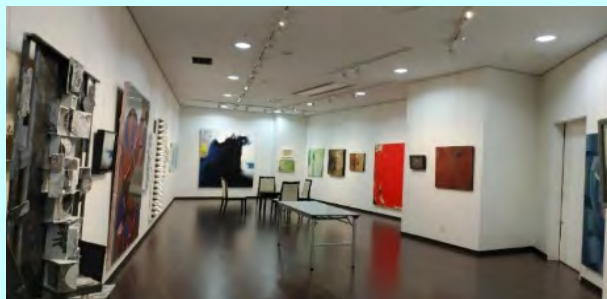
■つくば美術館周辺の観光

—筑波山—

「西の富士山」「東の筑波山」と言われる関東の名山。男体山と女体山からなり、夕日に照らされると山肌が紫色に見えることから別名「紫峰」と言われている。「ガマの油売り」や奇岩「弁慶の七戻り」で有名。またパワースポットでも知られている。山頂からは関東平野が一望でき、遠く富士山、都心の高層ビル群などが見られる。

2020 女流画家協会 新宿展 report

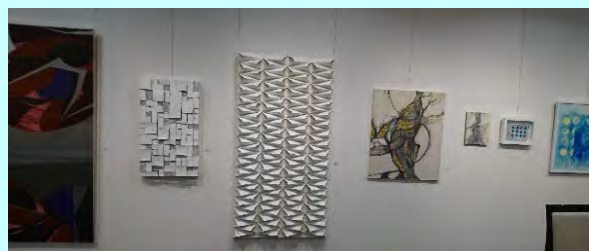
2020年1月に中国武漢で新型コロナウイルスの猛威が報道されてから、春にはもう世界中でその脅威におののく生活を人々は強いられることになりました。日本でも、緊急事態宣言が発せられ、美術館までもが閉館を余儀なくされたのです。



毎年開催するはずの東京都美術館での女流画家協会展も延期の決断となりました。静岡県美術館で地方展としての開催を企画しましたが、これも諸所の事情により不可能となったところへ、都内の会場が使えるかもしれないとの情報に接したのは8月のことです。急遽、女

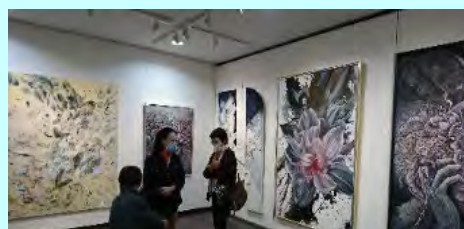
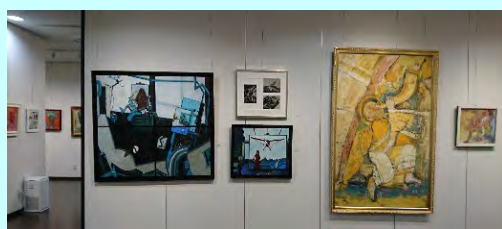
流画家協会にその旨を報告し、情報提供者のアートディレクターと折衝を始めました。「2020年に大作の発表は無し」と、無念の思いを覆すチャンスです。

会場は新宿ヒルトンホテルの地下にあるヒルトピアアートスクエアです。総展示壁面長は約95m。会期は10月29日(木)～11月9日(月)準備期間はわずか2か月しかありませんでしたが、委員会での提案に賛同者を募り32名出品の展覧会となりました。



130号を上限とする68点の作品が展示されました。

コロナ禍中であることから、オープニングパーティは企画しませんでした。初日に参集された皆さんでソーシャルディスタンスを保ちながら展覧会が開催されたことを喜びました。この展覧会を専門誌各社も注目し、紙上で取り上げ総評も掲載されて、規模は小さいながら女流画家協会展としての面目を保てたのではないかと思います。(須藤美保 記)



女流画家協会新宿展に参加して

コロナ禍で次々と展覧会が中止になり、女流画家協会展も74回展が延期になって、モチベーションが下がったところに、9月委員会で、突然新宿展の話がありました。委員達も発表の機会を望んでいたその日に多数の出品希望者が集まり、新宿展が開催される事になりました。

開催まで短期間でしたが、事務局の素早い対応で無事開催する事ができました。あまり広い会場ではありませんでしたが、具象と抽象の室に、大作、中、小作品が、バランス良くすっきりと展示され、見応えのある充実した展覧会になったと思います。懇親会はできませんが、久しぶりに出品者が集いコミュニケーションを持つことができました。コロナ禍の中で展覧会を開催できた事は有意義だったと思います。

(金谷ゆみえ 記)

画家 甲斐仁代 ー甲斐仁代展からー



アトリエでの甲斐仁代 (甲斐仁代ギャラリー蔵)

女流画家協会展には、かつて「甲斐賞」という賞がありました。この賞は1969年第23回展から第42回展まで20年間続き、後に続く優秀な先輩たちを勇気づける力となりました。今も現役でご活躍の服部圭子、渡辺由紀子、高橋和、遠藤彰子各委員も受賞者の一人です。甲斐賞は知られていても、甲斐仁代という人物そのものについてはあまり知られていません。どのような画家だったのでしょうか。

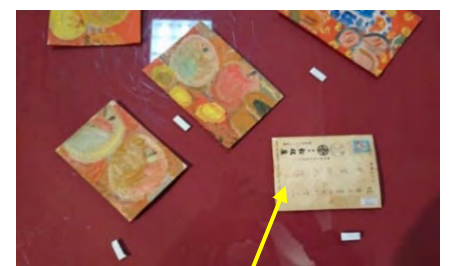
●絵一筋の人生

甲斐仁代は、1902年佐賀県に生まれました。父親の転勤により、14歳の時から女学校卒業までの多感な時期を中国青島で過ごします。卒業後帰国した仁代は画家を目指して上京し、女子美術学校西洋画科で岡田三郎助の教えを受けました。1923年、21歳で第10回二科展に初入選した時には、ただ一人の女性入選者として話題となります。以後、二科会以外でも旺玄会、一水会と多くの公募展に出品するとともに、個展を催すなど、女流画家の草分け的存在として活躍しました。1932年には婦人洋画協会の設立に参加しています。戦時中、陸軍報道部の元に女流美術家奉公隊が組織されました。ここには、日本画、洋画の枠を超えた多くの美術団体から約50名の女性美術家たちが集まり、仁代もその一人となりました。戦後、仁代は女流画家協会の会員になり、1963年に61歳で亡くなる直前まで出品を続けました。また、一水会会員でもあり、日展にも出品しています。後年は同郷のブリヂストンタイヤ創業者・石橋夫妻の温かい支援に励まされながら、自己の画境を深めていきました。現在、東京国立近代美術館には甲斐仁代の作品が3点所蔵されています。

●画廊にて 小さな絵の世界

その甲斐仁代の展覧会が開かれるという話を岡田菊恵委員からお聞きし、10月30日、練馬区内の「ギャラリー呉天華」を訪ねました。展示されたのは、常陸大宮市にある「ギャラリー甲斐仁代」所蔵作品を借り受けたものです。壁には、戦前から1950年代までの人物、風景、静物画が飾られ、仁代の、絵に対する思いが伝わってきます。目を引いたのは、テーブル一面に置かれたとても小さな作品群でした。どれも単純化された果物の静物画ですが、なんとハガキの裏に描かれていたのです。

オーナーの岩本瑠美さんの父である画家呉天華氏は、仁代と交流がありました。幼い頃、仁代に可愛がってもらったという瑠美さんは、仁代の絵と向き合う姿について当時の思い出話をされています。



ハガキの裏に描かれている



個人蔵

「父呉天華は、練馬アトリエ村の東側にあるアトリエを住まいとしていました。道を隔てた西南のはずれに甲斐仁代さんのアトリエがあり、父と気が合うのか、よく家に来てお酒を飲みながら芸術談義をしていました。一緒にモデルを呼んで裸婦像を描いたり、時には陶芸の絵付けに出かけていました。このアトリエは甲斐さんの終の住処となりました。多作の甲斐さん、身近にある厚紙や、板に素早く鮮やかな筆致の作品を多く残しました。」

会場では、案内状などのハガキの裏やポスターの裏に、油絵の具で描いた作品を多数見ることができました。生き生きとしたタッチで描かれた色鮮やかな小さな絵から、常に描きたくてたまらなかった仁代の画家人生が浮かび上がってきました。

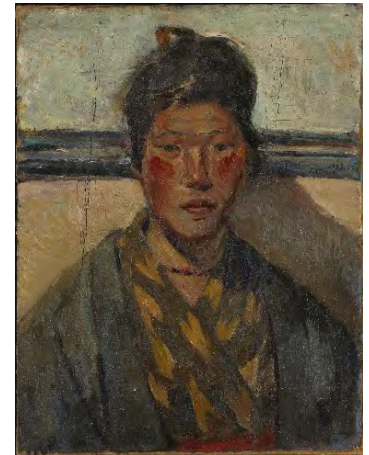
●甲斐賞について

50回記念女流画家協会展画集の中に、「石橋夫人が友人の故甲斐仁代さんを記念しての提供。同夫人の没後、扱者の鈴木画廊が提供（40回より3年間）」という記述があります。石橋夫人による設立からそれを引き継いだ鈴木画廊まで、20年間続いた甲斐賞は、会員賞の中では女流画家協会賞に続く重要な賞とされています。

甲斐仁代さんの思い出

高橋和（第33、38回展甲斐賞受賞）談

ほんの短い期間でしたが、深沢紅子先生の、モデルとお手伝いさんをしながら、お宅の2階で絵も描いていた頃の事です。ある時、ご近所にお住まいという画家の甲斐仁代さんが、たわわに実のついた大きな枇杷の枝を肩にいらした事がありました。つばの無い小さな帽子をかぶられ、暖かい色味のお洋服で、今思うと甲斐さんの絵の感じそのままと思います。その折の深沢先生、珍しくご自分でお酒のガラスの徳利と、可愛らしいこれもガラスの盃を用意なされ、アトリエで、大分長い間、静かにお話をしていた事等も久し振りに思い出しました。



「自画像」

東京国立近代美術館蔵 1923年

甲斐賞を受賞して

服部圭子（第30回展甲斐特別賞受賞）談

甲斐仁代さんご本人については存じませんが、当時受賞した時に岡田節子先生から「女流の重鎮だった方で、その賞をいただくのは光栄なこと」と言われ緊張したのを覚えています。賞を扱っていた鈴木画廊には、岡田先生からご挨拶に行くように言われて、オーナーの鈴木康子さんにお会いしました。鈴木さんは色白で目がクリっとした優しい方の印象でした。若かりし40数年前の事が懐かしく蘇ってきました。

伝説の人 甲斐仁代

岡田菊恵

甲斐仁代は伝説の人だ。女性には珍しい王道を歩いた人だと思う。女子美大で岡田三郎助に教えを受け、旺玄社に属し牧野虎雄との交流が有り、これが絵画の母体になり非常にラッキーであったと思う。後に一水会へ出品し会員となっていますが、此の牧野虎雄との出会いが一番のクスリとなったと思う。



ハガキの裏に描いている絵

個人蔵

女子美大卒業後もチンタオ（青島）で個展をしたり、絵を描くだけで生活は大変であったが、後にブリヂストンタイヤ創業者の石橋ご夫妻に、同郷でもあり非常にお世話になった事も大切な画家として有難い出会いです。



お酒が大好き、食事は醤油かけご飯で急いで食べる、すぐ絵を描くとおおよそ健康に気遣うことなく命も短くしたのではと思う。残された小さい葉書き大の絵は本当の葉書きの裏がキャンバスです。すべての展覧会の案内状は全部美しい絵となり愛らしい空間を作り、置かれたモチーフは静かに絵画の素晴らしさを歌っています。チョッと拝見すると子供が描いたと思えますが、ドッコイその筆の配りの速さの素晴らしいこと、筆についての絵具は無駄なく次のタッチに的確に配り送って着地させています。色彩も透明で美しい永遠にあこがれる画家だと思います。

長谷川利行と同じで、今後はこういう魅力ある人はなかなか出現しないのではと思う。

先生と私の？十年

山口孝子

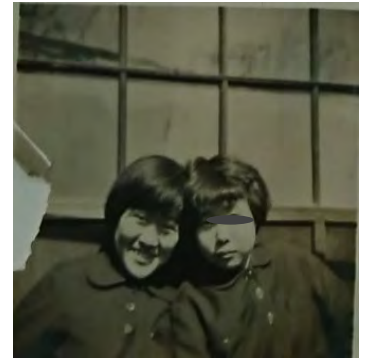
大昔になってしまったが、私が女子美の附属中学に入学した頃は、まだ丸の内線がなく青梅街道の真中を都電と都バスが走っていた。「高円寺1丁目、天神前」が都電の降車停留所だった。当時の附属中は、制服も現在のモダンなものとは全く違い、中学1年1クラス40人足らずの小ぢんまりした家庭的な学校で、美術を目指す学校というより本郷の佐藤高女の名残りがあった。私が入学したのも兄や姉が都立高校でそれぞれ好きな勉強に打ち込んでいるので末っ子でのんびりやの私には、上まで続く学校をと母が選んでくれたからだった。

はじめての美術の時間！皆どんな先生が来られるかわくわくしながら待っていたら、白いふわっとしたロング丈のワンピース、胸が一寸大きめにあいて、ちょうちん袖の女神のような先生が入ってこられた。今井麗子先生（現姓吉江）だった。平々凡々に慣れているのにお化粧も目の上を青くした美しい女神！しばし見とれてしまった。教室の真ん中に大きな壺をいくつか並べ沢山の色美しい花を入れ、皆が取り囲むと「どうぞ、どんどん、お描きになって！」と美しい声が響いた。まあ一お上品な先生！大胆に自由に描いていた作品を「なかなかいいじゃないの！お上手よ！」2時間あっという間に終了。何点かの作品を黒板に貼られた。

返却された作品の裏には、詩のような批評を不思議な字で（13才の目で見ても）流れる様に必ず書いて下さり嬉しかった。確かこの頃に女流展で賞を取られ婦人雑誌に写真が出ていたのを拝見し、「わあーすごい！今井先生」と喜んだこともあった。

その後、私は女子美の洋画に入り、卒業後、女流画家協会と先生と一緒することになった。お会いすると、ふと昔の今井先生の時代が蘇る時がある。先生の今も昔と変わらないのは、堂々と背筋を伸ばして姿勢のいい姿。私の今日あるのも中学時代の優しい先生方との出会いのおかげと感謝している。

先生どうかいつまでもお元気で！（ワインもほどほどにお願いします）



左側が筆者



1955年 高校1年4月 スケッチブックを手に 後ろは女子美術大学附属高校旧校舎

個展・グループ展 紹介コーナー

新型コロナウイルスの感染拡大によって、私たちの日常が様々な制約に晒され、精神的、物理的苦悩を強いられている厳しい状況の下でも、女流画家協会所属の方々個展、グループ展が多数開催されました。2020年後半から取材させていただきました中から、紙面の関係上、今回は3つの個展、2つのグループ展を紹介させていただきます。

(照山ひさ子 記)

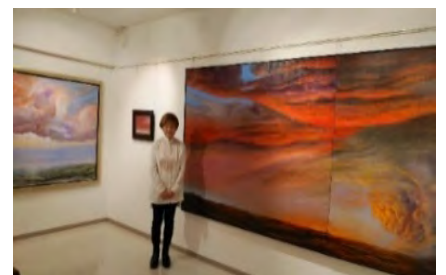
後藤静子個展 “The Sky”

銀座第7ビルギャラリー

2020.10.19～10.24

昨年の自粛期間私は毎日、絵を描いておりました。重い空気の時間が静かに絵を描く時間になり充実した有難い時間に代わっていきました。

私の絵のテーマは「ザ・スカイ」です。無限大に広がる空のドラマを描きたいと思っています。激しく荒々しい空、静かで穏やかな空、ぼんやりと雲の合間から見える光、どの様な空にも途方もない魅力を感じています。空を見ていると気持ちちはどんどん大きくなり、広く広くもっと広く広がっていきます。今は星が降り注ぐ情景を描いていますが初めての挑戦で不安も一杯です。たくさんテーマを教えてください空はつぎの事ない私のテーマです。ずっと描き続けていきたいと思っています。



狩野三也子展

GALLERY うえすと

2020.11.9～11.14



不安にかられ悶々とした日々を過ごしておりましたが、なんとか絵を描くことを続けようと、毎晩、紙に墨汁で日記のように、気の向くままに、一日1～4枚を描き始めました。すると1枚描くごとに私の内から力が湧いてきて、30枚を越える頃には、個展開催に前向きになっている自分に気づきました。これまでずっと追ってきた「水の庭」というテーマの油彩作品に加えて180枚を超えた小さな作品の中から68枚をF130号(24枚)×2枚、S100号(20枚)に張り込み展示することができました。初めての個展を終え、絵を描くことは私の生きる力の素であり、生涯描き続けていたいと思えるようになりました。素晴らしい絵は、観た人を暖かく包み込み、生きる力を与えます。いつかそんな絵が描けますように。

関口聖子展

ギャラリー惣

2021.3.1～3.6

ギャラリー惣における3回目の個展でした。制作のテーマは、生命の営みの、多彩で精密な形態の追求です。行き詰まると、気分転換と新たな素材探しに、車で辺りの野山を心ゆくまで走り回りました。部屋はたちまち風変わりな花、野菜、茸といった収穫物でいっぱいです。これらがすべて生命を持った自然の産物だと思えば、細胞一つも面白く目を奪われてしまいます。個展に来てくれた女流のGさんが、白内障の手術をしたら世界が一変してクリアに見えるかと感動的に話しました。そして、あなたの絵もすごくきれいだ。え！私の絵がクリアに見えるって？それは私が見る自分の絵とどこか違って見えるということかしら。自分の絵にまだ見えていない領域があるのだろうか。欲張りな私は、それをぜひ自分も見たいと思いました。今もずっと、私はそのことに拘っています。



「草莽の風展」

K's Gallery

2020.11.2～11.7

昨年11月、第5回「草莽の風展」がコロナ禍の中、K'sギャラリーで開催されました。第1回は、2015年8人の抽象作品によるグループ展でした。「草莽」は「そうもう」と読みます。岐阜県にお住まいの渡辺由紀子先生が名付け親です。辞典には「民間、在野」とありますが、自由にもっと自由に！という意味と私達は思っております。



第1回は、立上メンバーの渡辺由紀子、高橋和、山内恵美子、それから松本恵美、金谷ゆみえ、本田昌子、八木芳子、岩井洋子によるスタートでした。メンバーは流動的で自由です。お互い、自分らしい表現を模索しつつ制作しています。オーナーの人脈でしょうか、一期一会のサインを残していった中国の美術関係の人達、最終日サプライズパー

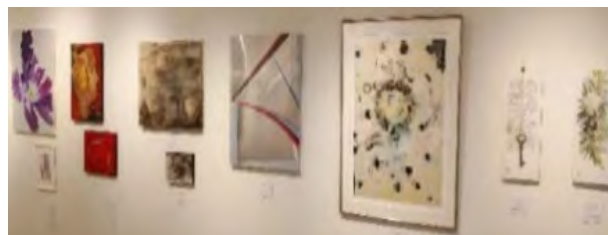
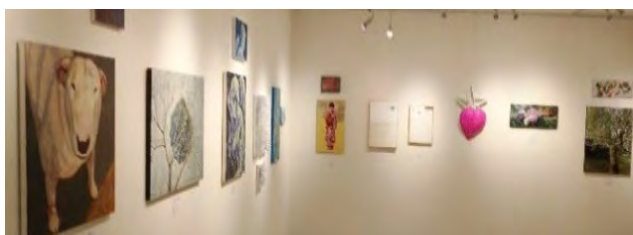
ティを用意してくれたジャズシンガーの男性、お客様は多種多様です。今回は新宿展と同時開催でしたが、270人程の方々が見に来て下さいました。(岩井洋子 記)

「華・華・展」

Gallery 風

2020.11.30～12.5

今年の「華・華・展」の参加者は25名で、銀座の“ギャラリー風”で開催されました。新委員も参加して幅広い年代の作者が集い、主にF20号～4号ほどの小品展でした。会場は具象や抽象から半立体など、多様で小品ならではの身近な味わいのある作品が並び、見応えのある展覧会になりました。また作家の方々の、日々の地道な制作活動の一端を見る事もできました。銀座での小さな展覧会でしたが、思いのほか多くの方々にご来場頂きまして、来場者の方と作品を介して率直な意見交換などもあり、有意義な交流がもてました。(黒沢・前田 記)



女流画家協会研究部

昨年はコロナ禍の為1、2、7月の3回の実施でしたが今年は今度の都美術館が休館にならない限り、定員申込制で感染対策を十分とったうえで実施する予定です。スタジオの人数制限が25名となり、モデル、講師、担当3名を除くと、20名の定員制になりました。今迄恒例になっていた意見交換の場としての茶話会やダブルポーズも人数の関係で中止としました。



コロナがこれからどうなるか、まだ不安は残りますが、通常より人数が少ない分、ゆったりと好きな場所を確保できます。1月から再スタートし少しずつ参加者も増えています。昨年7月より始まったムービングも、固定20分×5ポーズの中に1回20分を入れていきます。コロナが1日も早く収束し、部員の方々と以前のようにお会いできます事を楽しみにしています。また、新しい方の参加をお待ちしております。

(担当 松本恵美、岩井洋子、瀬谷貴久枝)

女流画家協会ホームページ紹介

<https://www.joryugakakyokai.com/>



—協会概要や出品規定、入賞作品画像などを掲載しています—

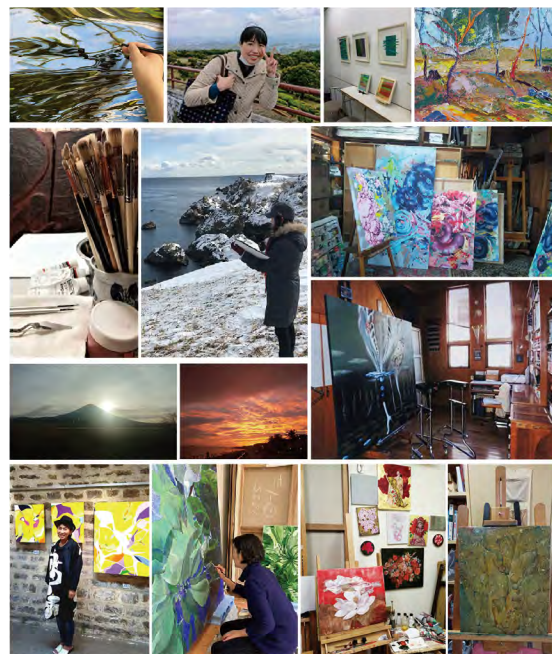
♥ 昨年から2つのページが加わりました。

1 委員・会員 個展グループ展情報

都内だけでなく、全国の情報が集まるよう努めています。開催の際はDMをHP係（中嶋）へ郵送をお願いします。

2 女流画家協会ブログ

カテゴリー「研究部」「委員日記」に加え「作家日記」を追加しました。現在（3月末）作家14名のお住い地域の風景写真と制作日記を掲載しています。コロナ禍で外出もままならない中、全国の協会員がブログでつながれたら、との思いで寄稿を依頼しました。ご協力ありがとうございました。今後皆様で盛り立ててくださいますようお願い申し上げます。
(中嶋しい記)



2022

第75回女流画家協会展のお知らせ

会期 6月5日(日) ~ 13日(月) 東京都美術館

編集後記

コロナ禍で先行きが見通せない中、希望を持ち続け頑張っている方々にエールを送りたい。絵描きは何をすべきか、問い直す日々が続く。(K)

女流画家協会 会報

Vol.10-2021.5

発行日: 2021年5月29日
発行: 女流画家協会
編集委員: 金谷ちぐさ 照山ひさ子

女流画家協会 事務所

代表 中村智恵美

〒210-0024
神奈川県川崎市川崎区日進町1-2-307
TEL & FAX: 044-272-5200